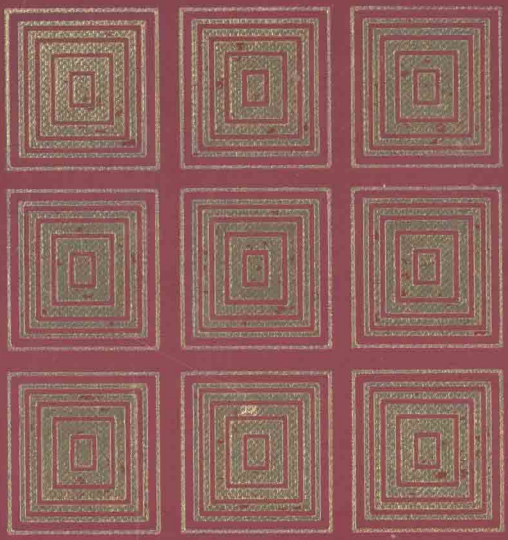
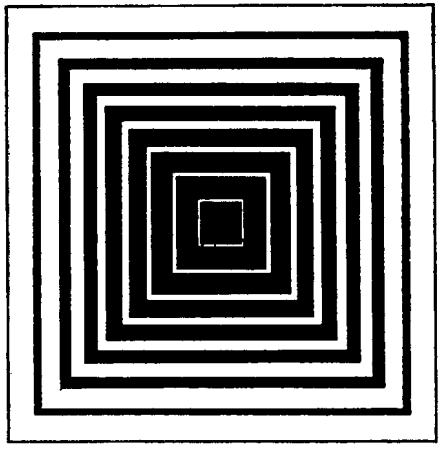


古典文学入門

久松潜一・川端康成・円地文子
山本健吉・中村真一郎　共編



日本の古典

河出書房新社

日本の古典

古典文学入門

昭和四十六年十一月二十五日　印刷
昭和四十六年十一月三十日　発行

編者代表　川端康成
装幀者　亀倉雄策
発行者　中島隆之
発行所　株式会社河出書房新社
東京都千代田区神田小川町三丁目六番地
電話　東京(292)三七一一(大代表)　振替　東京一〇八〇二

印刷　凸版印刷株式会社
製本　加藤製本株式会社
製函　加藤製函印刷株式会社
本文用紙　本州製紙株式会社
クロス　日本クロス工業株式会社

非売品
©1971

古典への招待

——序に代えて

現代の私たちは古典を喪っている。私たちには古典というものはない。——

こう書くと、何を云うのだ、私たちは千数百年の文学伝統を持ち、文学史には古典の名が読みきれないくらい沢山に並んでいるではないか。また厖大な数にのぼる古典文学全集の類いが、原文や翻訳やで数種類、刊行されもしているではないか、と容易に反駁の声が上るだろう。

よろしい。その反駁から実は問題が出発するのである。

あれらの文学史に並んだ名、また古典文学全集のなかに肩をよせ合っている作品の行列は、今日では古典ではない、古典の遺骸、あるいは古典候補者名簿に過ぎない。

しかし、それなら私たち日本人——あるいは日本文学を愛好する外国人——にとって、いつ古典が存在したか。

たとえば平安朝末期においては、その盛時の文学的産物は悉く古典となり、教養ある人々にとって、歌といえば『古今集』であったし、物語といえば『源氏物語』であった。

藤原定家はそう考えて、『源氏物語』のなかの情景を空想しながら、『古今集』の語彙と歌い振りとに従って、自分の歌を制作した。

そして、定家のような前衛的な人々だけでなく、保守的な人々のあいだでも、たとえば『古今集』

は下らない歌の集りであり、『源氏物語』はつまらない物語である、と考えていた者はいなかった。

この文学的基準は、江戸時代にもそのまま復活する。蕪村は王朝の美学によって誹諧に一新境地を作りだすし、柳亭種彦は『源氏物語』のパロディー『偐紫田舎源氏』を書く。

彼等にとっても、王朝文学は共通の古典であった。

しかし、明治の維新革命は、古い日本のすべてと縁を切ることを、その行動綱領の最初にかかげた。

その時、それまでの千数百年間の日本の古典文学の基準は一挙に崩壊を迎えることとなった。

そうして、その古典の廃墟のうえに立って、それ以前には一度も試みられたことのない「日本文学史」を作るという新しい仕事が、学者によって行われるようになる。

江戸末期まで、何度も中断はあったけれども、漠然と信じられていた、日本文学の流れの展望では、中央の頂上のところに平安朝盛期の文学がそびえ立っていた。それ以前の、またはそれ以後の文学は、たえずこの頂上を見上げながら、その裾野に向って展開していた、と云っていい。

だから、わが国の文学にとっては、王朝の盛時の文学は、フランスの文学の歴史における十七世紀古典主義文学のような位置を占めていた。そうしてその位置について、従来のどの文学的世代も疑いを抱くことはなかったように見える。江戸時代の漢学者たちにとってさえ、日本の文学とは王朝文学に他ならなかった。

しかし明治の新しい文学的世代にとっては、自分たちが王朝文学の裾野に位置するというような展望は、我慢のならないものであった。

新しい文明開化の時代は、西欧の文学に学んで新しい文学の創造に出発していた。その新しい立場から、過去の古い文学を見通して、新しい歴史的筋道を立てるということ、それが新しい国文学者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

――それは従来の国学者とは異った、西洋流の文学研究の方法を学んだ人たち――の役目であり、使命であった。

そこで彼等はどうしたか。彼等は旧来の価値の秩序を御破算にし、そして、まず歴史的区分――それは政治史の区分そのものであったが――原始、奈良、平安、鎌倉、南北朝、室町、戦国、江戸などの年表のなかに、各時代の文学的財産目録を作りあげた。

この場合、その新しい基準は、ひとつの王朝美学というものではなく、各時代はその時代に応じた文学ジャンルと美学とを持つという客観的立場をとり、特に西洋風の、詩とか小説とか評論とか戯曲とかいうジャンルの考え方を採用して、旧来の文学作品をその新しいジャンルのなかへ分類し直した。

そうして謡曲や浄瑠璃は「戯曲」となり、和歌や俳諧は「詩」となり、従来は軽視されていた江戸後期の戯作のたぐいは「小説」に昇格して、文学となった。

明治の文学史作成の仕事は、そのようにして従来は文学としては低く見られていたり、無視されていたりした多くの作品を、いわば『古今集』や『源氏物語』と同格に扱うという、驚くべき革新を行うことになったのである。

そうして、そこに空前の古典名簿ができ上った。明治以降の近代日本人にとっては、無数の古典が並存する、ということになった。それは無数の恋人を持つ人に似ていて、古典が数かぎりなくあるということは、全然ないというのと同じなのである。

そうした無差別的博愛主義のなかから、もう一度、古典の名にあたいするものだけを選り分けようという動きがでてきたのは、大正に入ってからである。

最初は西洋的教養による文学鑑賞の立場からであって、個々の作品が果して文学の名に価いするか

どうかが、選別の基準になってきた。

果して『古事記』は文学であるか？　果して近松は戯曲であるか？　果して馬琴は小説であるか？　などなど……

しかし、こうした当然の反省は、まもなく緊迫してくる昭和の政治情勢のなかで、次第に強力な「愛国的」立場にとって代られる。

国士風の国文学者は愛国的パンフレットや評伝のようなものを書きだし、皇道史観によって『源氏物語』さえもが危険視されるに至る。そして文学史は慎重な文献的報告のようなものにまで後退することで、その古典候補名簿の削除を免れようと努力する。

しかし敗戦によって、その特殊に狭い愛国主義的見地からの古典の専制的解釈は、また一気に崩壊し、ふたたび自由解釈の時代がはじまる。

そこで戦争中は光源氏と藤壺との関係を消去することで辛うじて出版が許されていた谷崎潤一郎の現代訳『源氏物語』も、ようやく全貌が陽の目をみることができるようになったし、王朝末期の頽廃期の物語類の本文批評や注解やも急進歩をするようになる。

――それにしても、一国の代表的古典である『源氏物語』、明治維新前までは日本の文化的伝統の頂上にあった作品が、とにかく全訳できない、というような時代は、その時代が文学にとっては悪しき時代、文学の創造力と鑑賞力との歪められた時代であることは間違いないだろう。

戦時中の言論統制のきびしかったドイツやイタリーでも、ゲーテやダンテが削除されたという例は見られないのではなかったろうか。

これは同時に、日本における言論の自由の歴史の浅さを現していると共に、文学というものの社会

のなかで占める位置の低さ、というものとも深い関係があったことだろう。

だから、戦争直後における古典の総解放という現象は、文学というものを日本の文化の再建の支柱としたいという、真面目な衝動の現れだと考えることもできる。

そこで最近の二十年間は、おそらく日本の文学の歴史のうえで、最も大規模に古典の再点検、何が古典であるかの探究の行われた時期だということになる。

それは従来、全く無視されていた作品の発見と同時に、従来の解釈をその作品から引き剝がして、今日の眼で見直すという仕事でもあった。又、いわゆる恣意的な「近代的解釈」――これは明治時代に屢々行われたのだが――から、古典をもう一度、その生れた時代の風土のなかに戻して考えてみるという試みでもあった。

そうして無数の学者や文学者によって、無数の作品への接近作業が行われた。その成果のなかで特に興味深い一部分が、ここに一冊に纏められて、今、読者に――特に若い読者に――向って提出されるのである。

そこには戦前に書かれた同じ試みのものも、幾分、含まれているが、それらをも含めて、今、こうして一冊となって通読する時、私たちはその個々の文章が実に、多岐な方向に主題を展開させ、また多様な文体によって作品の美を再現していながら、その多彩の背後から、たしかにひとつの「現代」が浮び上ってくるのを感じることができる。

古典の再発見は、その先にそれに刺戟されて新しい前衛的な文学を生むものである。定家は『古今集』と『源氏物語』とから、全く新しい新古今調を生みだした。

私たちの文学もそのような古典発掘の作業を続けながら、その成果から新しい文学を生んで行くだろう。

この一冊はそうした自然の運動の一里程標となるべきものである。

中村真一郎

古典文学入門　目次

古典への招待　中村真一郎　一

＊

総論

日本文学と風土　久松　潜一　七

古事記・風土記

稗田阿礼　柳田　国男　一八

火山列島の思想　益田　勝実　二五

万葉集

抒情詩の運命　山本　健吉　三三

王朝の物語

伊勢物語序説　窪田　空穂　四三

日本の創意　折口　信夫　五三

源氏物語を巡って　中村真一郎　六〇

王朝の日記随筆

枕の草子　川端　康成　七三

『和泉式部日記』序　寺田　透　七六

更級日記　堀　辰雄　八九

とはずがたりと王朝日記　竹西　寛子　九四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

古今集・新古今集とその周辺

古今集の新しさ　大岡　信　一〇一
新古今集の叙景と抒情　風巻景次郎　一〇九
西行小論　吉本　隆明　一一七
金槐集に就いて　加藤　周一　一二三
吉野山はいづくぞ　丸谷　才一　一二六

軍記物語の世界

平家物語　小林　秀雄　一三〇
日本ドラマ論序説　木下　順二　一三三
軍記物語について　杉浦　明平　一四三

乱世の哲学

人間と罪　亀井勝一郎　一四九
兼好と長明と　佐藤　春夫　一五九
芸術家の運命　山崎　正和　一六九

民衆の文学

「今昔物語」の世界　福永　武彦　一八〇
はなしの台本　池田弥三郎　一八八

近世の思想家

『折たく柴の記』について　桑原　武夫　一九四

本居宣長　吉川幸次郎　二〇〇

近世の文学

西鶴　暉峻　康隆　二〇四

近松の浄瑠璃　円地　文子　二一

芭蕉と無常　安東　次男　二二四

蕪村の俳句について　萩原朔太郎　二三〇

雨月物語について　三島由紀夫　二三四

「為朝図」について　花田　清輝　二三七

古典文学入門

日本文学と風土

久松潜一

一　日本文学の風土的区劃

日本文学の形成的基盤として第一に我が風土と文学との関係を扱つて見たい。日本文学は日本国民の生出した文学である点から言つて、日本文学の特殊な性格を有することは、即ち日本的性格を有して居ることは明らかであるが、さういふ日本文学の特殊な性格を形成するためには日本の風土や歴史がさうさせる点が多い。この風土性や歴史性は日本文学を形成せしめるものであるばかりでなく、「日本的なるもの」の一般的表現としての国民性や文化を生出す母胎でもある。さうして歴史性や風土性に就いても種々の解釈が立てられるが、こゝでは精細な考察は省略して、たゞ一二の点をとりあげておきたい。風土性は歴史性と関聯して考へられる。即ち歴史性が時間的であるに対して、風土性は空間的な性質である。むしろ歴史性は時間的なるものと空間的なるものとの綜合によつて形成されるのであるから、風土性も広い意味の歴史性の中に包摂せられるとも見られるが、しかし一応空間的地盤といふものを風土性として規定することは可能であらう。この事は上代に於ける歴史編纂の場合を見ても、和銅年間に古事記と風土記との二書が計画されて居るのである。即ち古事記に於て歴史的・時間的な古事の反省が行はれるに対して、風土記に於て空間的・地理的の反省が行はれて居る。この両者を合せて当時に於ける歴史的自覚の現れが見られるのである。さうして風土記も、結局は日本書紀といふ歴史の一材料として考へられたのである。その場合風土記に於て言はれる風土的性質に就ては、続日本紀の和銅六年五月の条に

> 畿内七道諸国郡郷名著二好字一。其郡内所レ生、銀銅彩色草木禽獣魚虫等物、具録二色目、及土地沃堉、山川原野名号所レ由、又古老相伝旧聞異事一載二于史籍一。

とある。即ち大体国々の地形・肥沃・名称等の事が問題となつて居り、更にそれから生ずる土地の産物や民間説話・歌謡等が扱はれて居るのであるが、これらを通じて風土的性質も見られる。かういふ風土的性質といへども、時間的推移に従つて変化する方面がある。即ち地形等は殆ど変らないにしても、それから生ずる産物や歌謡・説話等は変化し流動する。かういふ方面はしかし、地形といふものと関聯し、もしくは関聯によつて生出されたものとも見られるのであり、民間歌謡や説話は文学自体でもある。従つて上代に於ける風土の意味は相当に広く見られるのであり、風土を通じて歴史的なものをも見ることが出来る。この事は現在風土といふ立場に於て考へる場合にも、歴史的なものと関聯して居るのであり、結局風土は歴史的なものの一面として考へられるとともに、風土を取出して考へる場合にも、歴史的なものと結びついて居る。これが古事記・風土記の編纂の際に於ける風土的自覚であり、また現在にまで至つて居るのである。

さうしてかういふ歴史的・風土的なものは文学を形成するものとして考へられる。従つて日本文学を形成するものとしての日本の風土や歴史が如何なる特質を有するかといふ事を考へることも必要であるが、また日本の風土や歴史の特質の上から日本文学の様式を区分してみることも必要であると思ふ。

こゝでは第一に日本の風土を一の立場から区分することによつて日本文学の類型を考察し、その類型の展開を観察してみたい。風土の上

で最も自然的なるものは、位置即ち島嶼であるか大陸であるか、南北東西等いづれであるかといふ点と、地形、即ち土地の高低起伏の点とであるが、地形といふ点から言へば西欧の平原を主とするに対して、日本の風土は高低が甚しく、従つて狭い空間の中に山と原、もしくは水とが接近して存してゐる。山と水とが異なつた二つの風土の様式となつてゐる。かくて文学の形成といふ点から見ても、山を中心として形成される文学と水を中心として形成される文学とに分つことも出来る。この二つの様式の対立は日本文学に於て特に著しい。さうしてこの二つを更に吟味してゆけば、細かく分つことも出来るのであつて、水にしても川といふ形をとる場合と湖水といふ形をとる場合と海といふ形をとる場合とによつて異なつてゐる。これを文学といふ点からいへば

河畔文学
湖畔文学
海辺文学

といふやうにも分けられるのであり、それが山間文学と対立してゐる。この外に更に原野文学といふべきものを加へると各種の文学が存し、それぞれによる日本文学の類型を分つことが出来る。

これは高度の文学に於てのみならず、民謡や民譚の上にも現れて居り、方言の上にも見ることが出来る。たとへば民譚に於ける花咲爺と桃太郎との二つを比較すると、花咲爺の方は山を背景とする民間説話であり、桃太郎は水を中心とする民間説話であり、そこに両者の説話の相違が見られる。もとよりこれらが日本文学の各〻に単独に存するよりは、相互が相交錯して居る場合が多いのであるが、これらの地形の相違から来る文学の様式の存することは明らかである。さうして縦に日本文学の展開も、これらの推移によつて形成されることが尠くない。

即ちこの風土的相違を中心として日本文学の展開を考へて見る。日本文学の史的区分に就いては種々たてられるが、風土的立場から言へば都を中心とした区分が見られる。この区分は明治二十三年の三上博士等の日本文学史に於てたてられた奈良時代・平安時代・鎌倉時代・室町時代・江戸時代等の史的区分がほゞ初である。かういふ都もしくは政治的中心の土地の異動によつて、文化の上にも影響を与へることが多いのであるが、さういふ土地を中心として見ると、奈良を含めた大和は山を中心として、水の極めて乏しい土地である。幾度かの遷都もよき水を求めて行はれたとある。万葉集にも御井をよんだ歌が多いのを見ても、水を求めた態度は知られるが、やはり山を中心とした時代である事は高天原の神が高千穂峯に降られたといふ信仰や神武天皇が畝傍山に即位をあそばされたことによつても知られる。即ち大和時代は山を中心として居り、その間に生れ出た文学も山の生活から出た文学であると見られる。従つて大和文学の形成の上に山が大きな力となつて居ることは明らかである。これに対して平安時代文学は山城であつて、同じく山を中心として生れて居るやうであるが、大和と山城との相違は山として見れば大和の素樸な山と異なつて、山城の山は円みを帯びた山である。それは京都は水が豊かであるからである。むしろ平安文学に於ては賀茂川が文学形成の上に大きな力となつて居るのである。更に平安文学では近江の湖水が大きな力となり、更に浪華の海が大きな力となつてゐる。平安文学の特質は、この賀茂川を中心とした水から形成されて居る。さうしてこの水の文学の展開の間に山に対する思慕が時々起るのであるが、それは原郷を思ひ、妣国を恋ふるが如き形相として見られる。所謂「山ごもり」「山ずみ」は平安文学に於て見られるが、それは原郷を恋ふる如き態度に於て行はれるのである。しかし平安文学を生出したものは、「山ごもり」に安住せしめない。平安時代の文学に於ては一時的逃避として行はれたに過ぎない

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com